日本事務局

◆理事会（五十音順）

磯村　尚徳	外交評論家
オスタン・ガエル（理事長）	PMC株式会社代表取締役
大浦　紀彦	形成外科医
篠崎　康子	精神科医
ダヴィッド・パトリック	麻酔科医
寺島　左和子	形成外科医
早川　依里子	小児科医
原田　昌子	看護師
森川　すいめい	精神科医
山田　信幸	形成外科医
與座　聰	形成外科医

◆事務局（五十音順）

阿部　さやか	ドネーションサービス
石井　夕美	総務・経理マネージャー
小野寺　貴子	ファンドレイジング担当
片岡　英彦	広報マネージャー
熊澤　幸子	プロジェクト担当（東日本／ラオス小児医療）
畔柳　奈緒	事務局長
関　麻衣	ファンドレイジングマネージャー
玉手　幸一	プロジェクト担当（東日本／ラオス小児医療）
中村　あずさ	東京プロジェクト担当
堀江　優美子	ファンドレイジングチームアシスタント
マジョリ・メシニャック	事務局長アシスタント/プロジェクトアシスタント

◆パートナー（五十音順・敬称略）

アサヒプリテック㈱／アメリカン・エキスプレス・インターナショナル・インコーポレイテッド
アンスティテュ エステダム ジャパン㈱／IKEBANA ATRIUM／いちよし証券㈱
㈱エイペックスインターナショナル／㈱エー・アンド・ディー／エクスコムグローバル㈱
ヴァローナジャポン㈱／エーツーケア㈱／エドワーズライフサイエンス㈱／㈱エム・オー・エム・テクノロジー
エールフランス航空／㈱エルユーエス／LVMH モエ ヘネシー・ルイ ヴィトン・ジャパン㈱
大阪マラソン組織委員会／CAF AMERICA／外務省国際協力局民間援助連携室
グランドハイアット東京／㈱グリーティングライフ／特活）国際協力NGOセンター（JANIC）
コーチ・ジャパン合同会社／在日フランス商工会議所／財）ジャパンギビング／シャネル㈱
特活）ジャパン・プラットフォーム／ジョンソン・エンド・ジョンソン㈱／新横浜プリンスペペ
特活）セカンドハーベストジャパン／セールスフォース・ドットコム ファンデーション
全国労働者共済生活協同組合連合会／世田谷パン祭り実行委員会／㈱ソシエ・ワールド
ソフトバンクモバイル㈱／特活）チャリティー・アソシエーション／チャリティープラットフォーム
たまプラーザ テラス／㈱デジタルステージ／テックウインド㈱／デロイト トーマツ コンサルティング㈱
東京都共同募金会／東京西ロータリークラブ／東レ・ディプロモード㈱／㈱トヨタオートモールクリエイト
ナガイレーベン㈱／日本CA㈱／日本フロス㈱／パナソニック㈱／㈱バリューブックス／Fauré Le Page
富士フイルム㈱／プジョー・シトロエン・ジャポン㈱／㈱フェリシモ／フランス料理文化センター
㈱ブレスブルージャポン／フレンチブルーミーティング実行委員会／Paper Moon㈱／ボアレジャポン㈱
ホワイト&ケース法律事務所／本棚お助け隊／財）明治安田厚生事業団／メディカル・データ・ビジョン㈱
ヤフー㈱／UBMジャパン㈱／ユナイテッドピープル㈱／ユニー㈱／(株)ランナーズ・ウェルネス
日本労働組合総連合会／リンベル㈱／READYFOR㈱／ロレアル財団／ロンシャン・ジャパン㈱

世界の医療団（認定NPO法人）

特定非営利活動法人メドゥサン・デュ・モンド ジャポン
Médecins du Monde Japon

〒106-0044 東京都港区東麻布2-6-10 麻布善波ビル2F
Azabu-Zenba Bldg. 2F, 2-6-10 Higashi-Azabu, Minato-ku, Tokyo 106-0044, Japan
Tel: +81-(0)3-3585-6436　Fax: +81-(0)3-3560-8073
E-mail: info@mdm.or.jp

www.mdm.or.jp

世界の医療団

2015年3月発行

2014年度 活動報告書

©Veronique Burger Phanie

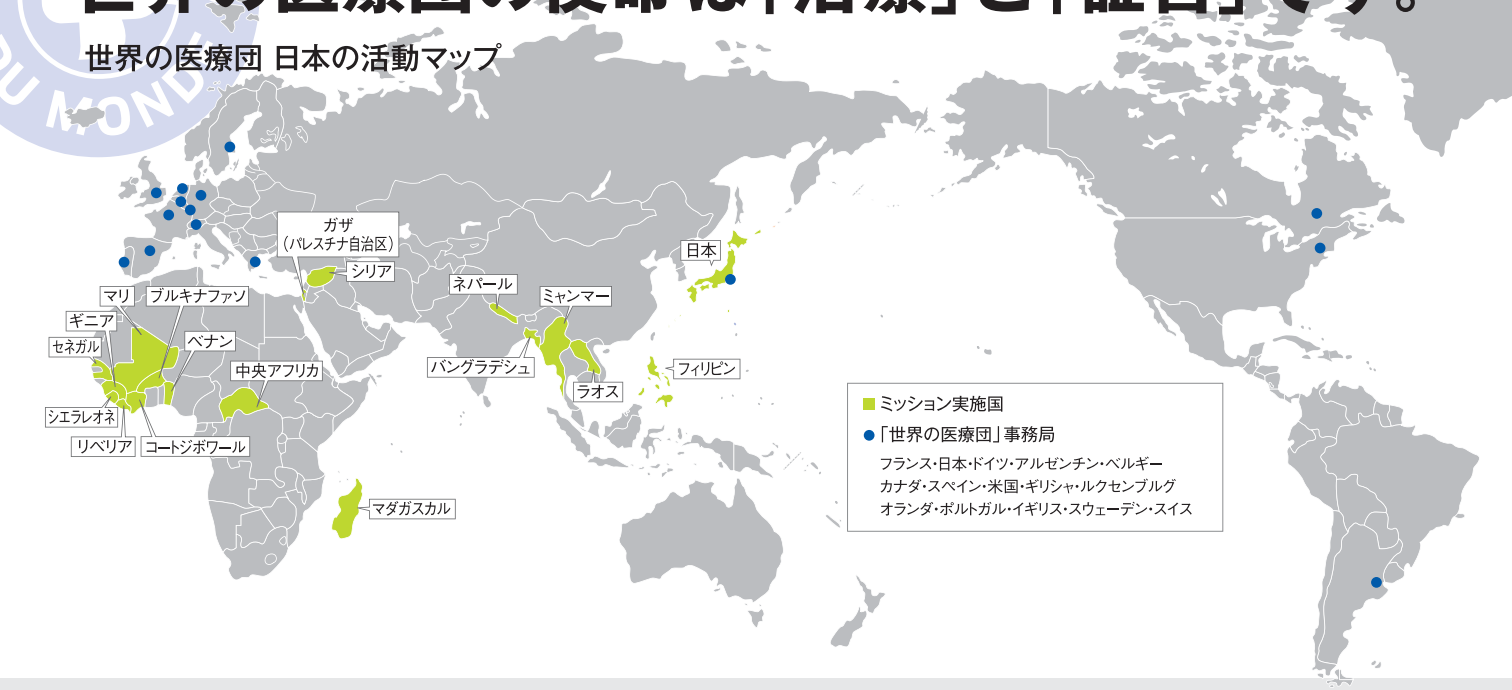
©Sébastien Duijndam

「誰もが治療を受けられる未来を。」

“POUR UN MONDE OÙ CHACUN PEUT ÊTRE SOIGNÉ.”

世界の医療団の使命は「治療」と「証言」です。

世界の医療団 日本の活動マップ



支援者の皆さまへ

誰にでも等しく保証されているはずの健康な生活の確保と、医療へのアクセスを実現するための活動は、次々と生じる課題に直面しています。2014年には、その現実を再認識させられる出来事が続きました。子どもを含む多くの市民が犠牲になった、イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への爆撃。西アフリカ地域で発生した、エボラ出血熱の大流行。広範囲に及んだ感染の広がりは、医療機関にとどまらず地域社会全体を混乱に陥れ、日本を含む広い地域も大きな影響を受けました。度重なる緊急支援のお願いに対し、その都度皆さまは遠く離れた場所で医療を必要としている人たちに心を寄せてくださり、迅速に応じてくださいました。皆さまのご厚情は、現地で緊急に医療を必要としている人たちのみならず、医療の現場で昼夜を分かたず身を挺して傷病者の治療に当るスタッフをも勇気づけるものでした。

緊急支援とその後に続く長期的な支援など、支援現場のニーズは目まぐるしく変わります。シリアでは、避難民の生活や難民キャンプを取り巻く状況がより一層厳しさを増しています。日本国内では、福島で避難生活を送る人々が生活再建を果たすまでの長い道のりを歩んでいます。

常に変化する状況に対応した支援活動は、皆さまからのご支援によって実現できました。2014年に頂戴しましたすべてのご支援に対し、心から深く感謝申し上げます。これからも、世界の医療団は医療へのアクセスを求める人たちがいて、資金が続く限り、必要としている場所と人々に医療を届けるべく持てる能力を傾けてまいります。今後とも私どもの活動を見守って頂き、変わらぬご支援を頂けますようお願い申し上げます。

世界の医療団　日本
理事長　ガエル・オスタン

◆ 2014年ボランティア派遣実績

医師9名（阿久津麗香、江口智明、岡田朋子、小松郁子、寺島左和子、早川依里子、森岡大地、山田信幸、與座聰）、看護師9名（新井朋美、石原恵、稲垣安沙、岩黒未来、上野早紀、木田晶子、定宗純子、辻ノ内幸恵、原田昌子）が、海外支援活動に参加しました。のべ895名のボランティアが国内支援活動（岩手県と福島県での被災地支援活動、東京プロジェクト）に参加しました。

［医療ボランティアの声］　精神科医　小綿一平

東日本大震災の後、精神科医として継続的に役に立てることはないかと日々焦燥感に駆られていました。そうした中、世界の医療団が被災地支援を行う「福島そうそうプロジェクト」に出合い、医療ボランティアの一員として加わりました。福島県相馬市の「メンタルクリニックなごみ」で2012年5月から、精神科外来を毎月1回担当しています。このクリニックは、震災後この地区の精神医療を支えるために設立され、全国から駆けつけた精神科医が診療にあたっています。外来診療の他、仮設住宅を訪問し高齢者の方々の健康相談をおこなっています。また啓蒙活動としては自殺予防講習会を実施しています。
クリニックを訪れる患者さんの多くに、震災と原発事故が影を落としています。各地を転々として戻って来られた方、他地域から転入されてきたが地元となかなか馴染めない方、賠償交渉で疲弊された方。震災から4年が過ぎましたが、福島では自殺者が減らず、その苦悩は複雑で深刻です。時の経過とともに、生活再建の度合いにも格差が生じ、故郷に戻りたくても戻れないストレスが重くのしかかっています。このため、今後も物心両面で息の長い支援が必要となっています。
世界の医療団は中長期の支援をその特徴の一つとしています。東日本大震災を体験した同時代人として、支援者の皆様方の熱い思いと患者さんの笑顔を支えに、必要とされる限り今後も東北の支援を続けてゆきたいと思います。

Central African Republic/Republic of the Philippines/GAZA

フィリピン、中央アフリカ、ガザ（パレスチナ自治区）

緊急支援

©Christophe Garcot

◆フィリピン

2013年11月にヴィサヤ諸島を襲った巨大台風は、医療機関を含む地域の生活基盤に壊滅的な打撃を与えました。世界の医療団は、マニラで医療支援を行なっていたことから、台風通過後に現地に入り緊急支援を展開しました。現地保健省との連携のもと、移動クリニックによる巡回診療を実施したほか、被災した人たちのこころのケア、妊産婦と5歳未満児の健診、ワクチンの接種などに当たりました。また、現地医療システムの早期復旧を図るため、被災した建物の修復や医療機器の提供を行いました。

◆中央アフリカ

政府と反政府勢力の衝突に端を発する紛争は、2013年末にクーデターが起きたことから悪化の一途をたどり、同国史上最大の人道危機にあるといわれています。暴力や略奪が横行した結果、国民460万人のほとんどが何らかの影響を受けているとされ、国民の半数近くが食料や清潔な水、医療へのアクセスがない状態に置かれています。このような状況下において、世界の医療団は、移動クリニックを実施すると共に首都バンギ周辺の3箇所の医療施設を支援し、けが人の治療や妊産婦のケアなどを実施しています。その結果、一部医療施設では産科機能の回復を実現しました。

◆ガザ（パレスチナ自治区）

イスラエル軍による爆撃は1ヶ月以上に及び、多くの市民がその犠牲になりました。少なくとも、パレスチナ人犠牲者のうち半数以上に当たる1,483人が市民で、うち521人は子供でした（国連発表）。毎日多数の負傷者が運び込まれる中、世界の医療団も現地での活動を強化しました。病院も爆撃を受け、医療物資が著しく欠乏する中、医師ら医療従事者が文字どおり命がけで、負傷者の治療やこころのケアに当たりました。無期限の停戦合意で爆撃は止みましたが、ガザ地区の再建までは、長い道のりを歩まなければなりません。

	フィリピン	中央アフリカ	ガザ（パレスチナ自治区）
人間開発指数（187か国中）	117位	185位	107位
5歳未満の乳幼児死亡率（出生1,000人中）	30人	129人	—
平均寿命	68.7歳	50.2歳	73.2歳
医師の数（国民1万人あたり）	—	0.5人	—

West Africa

西アフリカ地域

緊急支援（エボラ出血熱への対応）

エボラ出血熱の大流行は、アフリカ以外も含む9か国に及び、死亡者数は少なくとも9,000人に及び、2015年2月現在も増え続けています（国連発表）。治療法が確立していないことと、流行地域の医療インフラがもとよりぜい弱であったため、病気の流行によって医療施設のみならず社会全体を揺るがす事態に発展しました。病気に対する正しい知識が無いために、住民の感染リスクは高い状態で、一方で感染を恐れた医療従事者の職場放棄も相次ぎました。世界の医療団は予防こそが感染の拡大防止と終結に欠かせないと考え、流行地域とその近隣計8か国で活動を展開しました。医療施設スタッフに対して感染の有無を見極めるトレーニングを実施すると共に、住民に対しては、地域のリーダーや保健医療に従事する人たちを対象にした講座を開催することで、予防・啓発活動を展開しました。

◆活動地域
リベリア／シエラレオネ
ギニア／コートジボワール
マリ／ベナン
ブルキナファソ／セネガル

シリア Syria

緊急支援 → 長期支援

避難生活の長期化に伴い、避難民をめぐる状況は厳しさを増しています。避難生活を送る人の数が400万人に迫る勢いの中（2015年1月現在、国連発表）、難民を受け入れている周辺国の負担も増している状況です。避難民の多くは難民キャンプで暮らすほか、アパートに何家族も身を寄せ合うなどして毎日を生き延びています。世界の医療団は、2012年6月から緊急支援としてシリアからの避難民を支援してきましたが、事態の長期化に伴って支援を継続しています。シリアと国境を接するトルコ、レバノン、ヨルダン地域の8か所のキャンプでクリニックやリハビリセンターを運営し、傷病者の治療妊産婦のケアなどのプライマリヘルスケア、こころのケアなど幅広く対応しています。長引く避難生活で慢性病を悪化させたり、こころのバランスを崩したりする人が絶えず、今後も継続した活動が求められています。

人間開発指数
（187か国中）118位
5歳未満の乳幼児死亡率
（出生1,000人中）15人
平均寿命 74.6歳
医師の数
（国民1万人あたり） 15人

※人間開発指数・平均寿命　Human Development Report 2014 (UNDP)
※5歳未満児死亡率・医師の数　World Health Statistics 2014 (WHO)

ラオス Laos

長期支援（小児医療プロジェクト）

人間開発指数
（187か国中）139位
5歳未満の乳幼児死亡率
（出生1,000人中）72人
平均寿命 68.3歳
医師の数
（国民1万人あたり） 1.8人

ラオスでは、5歳未満で亡くなる子どものうち、約3割が下痢や肺炎など適切な医療があれば悪化を防げたはずの疾病がもとで亡くなっています（2014年、WHO）。医療費が支払えず、病院での受診が必ずしも一般的でないことなどが背景にあるため、本プロジェクトでは村落と協働で村民への健康教育集会を開くと共に、現地保健当局による5歳未満児の医療費無料化実施を支援しています。世界の医療団日本が、南部チャンパサック県2郡で活動を開始してから丸2年、医療施設の利用状況に成果が現れ始めています。2014年の5歳未満児の外来診療件数（暫定値）は、介入前の2012年と比べて2郡平均で4倍近くに上り、子どもを医療施設に連れてくる大人が増えたことが分かります。増えていく利用者のニーズに応えられるよう、医療施設と村落の連携強化や医療スタッフ研修を進めます。

ネパール Republic of Nepal

長期支援（マイクロファイナンスと医療支援の融合プロジェクト）

人間開発指数
（187か国中）145位
5歳未満の乳幼児死亡率
（出生1,000人中）42人
平均寿命 68.4歳
医師の数
（国民1万人あたり） —

マイクロファイナンスとは、貧しい人たちに小額のお金を融資する仕組みで、ネパールにおける女性グループの経済的な基盤になっています。世界の医療団は、山間部のシンドゥパルチョーク郡において22の女性グループを支援しました。受益者は4,000世帯に及びます。女性の地位が伝統的に低いネパールでは、出産の際に医療へのアクセスが無いために女性が命を落とすケースが依然として少なくありません。プロジェクトは、マイクロファイナンスを活用し、出産時の大量出血など専門的処置が必要になった時のためのお金を積み立てることで、医療へのアクセスを自分たちで確保する取り組みを支援しています。同時に、女性たちが会合で集まる機会を利用して健康知識の普及活動も行っています。

バングラデシュ、ミャンマー、マダガスカル Bangladesh/Myanma Madagascar

スマイル作戦

形成外科ミッション「スマイル作戦」は、1989年の開始から四半世紀が過ぎ、世界の医療団日本も1996年に日本人医師を派遣して以降、2014年までの間にのべ213人の日本人医師・看護師のボランティアを派遣してきました。先天性疾患である口唇・口蓋裂の手術は日本ならば生後数ヶ月で実施しますが、医療資源・技術の乏しい国では治療を受けらないまま成長し、世間の好奇の眼にさらされていることが少なくありません。治療を求めてやってくる人たちの中には、子どもだけでなく50歳の大人が含まれていることもあります。形成外科は生命に直接影響を与えるものではないため、医療資源が限られた国ではどうしても優先順位が低くなってしまうのです。そのような状況において、スマイル作戦は手術に加え、現地の医師たちと共に診察や執刀を行うことで技術移転を行うという役割をも果たしています。2013年からミッションを開始したミャンマーでは、専門医と呼べる形成外科医は10人に満たないそうですが、医師も看護師も手術を見学しながら質問をしたりメモを取ったりと、大変熱心です。寺島左和子医師は、「私たちチームも大いに刺激を受け、訪れるたびにもっとたくさんのことを伝えたい気持ちにさせられます」と話しています。2014年はミッションを5回行い、214件の手術を実施しました。前年に引き続き3か国でのミッションで、バングラデシュでは首都ダッカに加え、コックスバザールでも2012年に引き続き2回目となるミッションを実施しました。

◆バングラデシュ
【回数】2回　【期間】2月13日～2月21日、11月13日～11月22日
【手術件数】104件　【派遣ボランティア】延べ13人

◆ミャンマー
【回数】2回　【期間】5月25日～5月31日、11月30日～12月6日
【手術件数】74件　【派遣ボランティア】延べ12人

◆マダガスカル
【回数】1回
【期間】8月1日～11日
【手術件数】36件　【派遣ボランティア】2人

※人間開発指数・平均寿命　Human Development Report 2014 (UNDP)
※5歳未満児死亡率・医師の数　World Health Statistics 2014 (WHO)

日本 Japan

福島そうそうプロジェクト

東日本大震災と原発事故が発生してから3年以上が経過し、依然として多くの人が避難生活を送る中、2014年も引き続き福島県相双地区（相馬市、南相馬市、双葉郡）でこころのケアに当たりました。宮城・岩手両県においては震災関連死が減少傾向を示し始めているのに対し、福島県においては減少する兆しが見えていません。避難生活が長期化する中、個々人の生活再建状況にも差が出始めるなど、被災された方たちのこころの負担が軽減されていないことが要因と考えられます。世界の医療団は、現地のNPO「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」をパートナーに、ボランティアの精神科医、看護師、臨床心理士を派遣しています。特に、精神科医に関しては同NPOが発足した2012年から同じ医師を継続して派遣しており、診察した患者の方の8割以上を主治医として担当するなど、治療を受ける人がより安心感を得られるように努めています。また、仮設住宅から復興住宅へと転居する人が増えているため、仮設住宅でのサロン活動に加え、個別訪問も実施してきめ細かい対応を行っています。小中学生に対しては、現地NPO「相馬フォロアーチーム」と連携し、臨床心理士を学校に派遣して子どもたちのカウンセリングや教職員への助言に当たっています。

川内村こころのケアプロジェクト

世界の医療団は、村に精神科医を派遣すると共に、村への助言活動を行なっています。家族のうち高齢者だけが帰還し、認知症を発症するケースが増えていることから、万が一認知症になっても安心して暮らせる村づくりが今後の村づくりの鍵となっています。そのため、住民を対象にした認知症予防講座のほか、中学生を対象にした出前授業を村などと合同で企画、開催しました。認知症の高齢者の役と家族との会話のやり取りを生徒たち自らが体験することで、若い世代にも認知症患者との接し方を学んでもらう機会になりました。

ニココロ PROJECT（岩手県大槌町「こころのケア」活動）

東日本大震災の発生直後に、岩手県の要請を受けて全国から派遣されたこころのケアチームのひとつとして始まった活動は、2014年9月、3年半にわたる現場活動を終えました。2014年は、12回の「健康のつぼ講座」を大槌町社会福祉協議会生活支援相談員チームと共催。また、町の様相は変化し続け、それにともない住民の気持ちも変化していく…そんな中でニーズにあった支援を継続させるためにどう対応していくのかを、同生活支援相談員チームとワークショップを開催して議論しました。9月には、3年半ともに活動してきた多くの現地支援職の方々と交流会をもち、今後にもつながればと経験と教訓を共有しました。

*ニココロプロジェクトの報告書をご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい

東京プロジェクト（ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト）

東京・池袋を拠点に、路上で生活する「ホームレス」状態にある人たちのうち特に精神疾患、知的・発達障がいを抱えた人々への包括的な支援を行なっています。支援の必要な人を自分たちから探し出していくアウトリーチ活動、シェルターでの保護、リハビリテーションプログラムなど個々人の状態に合わせた支援を行なうことで、ホームレス状態から脱するだけでなく地域社会の一員として生活できるようになることが目標です。2014年は精神保健福祉士を新たに2名雇用し、チームでの相談や個室シェルターの運営など支援態勢を充実させました。しかしホームレスの人たちをめぐる環境は厳しく、毎月2回開催している無料の医療相談会には、2014年中にのべ954人が訪れました。

人間開発指数	（187か国中）17位
5歳未満の乳幼児死亡率	（出生1,000人中）3人
平均寿命	83.6歳
医師の数	（国民1万人あたり）23人

福島そうそうプロジェクト

川内村こころのケアプロジェクト

ニココロ PROJECT

東京プロジェクト

※人間開発指数・平均寿命　Human Development Report 2014 (UNDP)
※5歳未満児死亡率・医師の数　World Health Statistics 2014 (WHO)

証言活動

イベント（抜粋）

■ブース出展

アースガーデン灯・夏・秋／アースデイ東京・名古屋／グローバルフェスタ
よこはま国際フェスタ／世田谷パン祭り／フレンチブルーミーティング
大阪マラソン／ワンワールドフェスティバル　他

■チャリティイベント

クリスマスチャリティ抽選会、支援者の集い、湘南国際マラソン

■活動報告会

メディア（抜粋）

親善大使　滝川クリステルさんのメッセージ

「昨年はAC支援キャンペーンの広告制作物において、国の内外で実際に活動されている医療従事者の方々と共演させていただく形で、団体の広報活動に協力させて頂きました。
テレビや新聞、雑誌、ラジオ、電車の中吊り広告等の様々なメディアで、ご覧頂いた方も大勢いらっしゃったと思います。
親善大使4年目を迎え、今年もさらに多くの方々に団体の活動に関心を持っていただけるよう勤めてまいりますが、同時により詳しく世界の医療団の活動や活動の意義などを一人でも多くの皆様にお伝えできればと思っております。」

<テレビ>
■NHK【2014/8/14「大阪チャリティーマラソン」（山田信幸医師）】

<新聞>
■読売新聞【2014/8/14「大阪チャリティーマラソン」（山田信幸医師）】
■サンケイビズ【2014/7/7「ACジャパン支援キャンペーン」】

<web>
■Yahoo!News【2014/3/11「東日本大震災支援プロジェクト」】
■マイナビニュース【2014/4/11「スマイル作戦」（ポレット・フォシェ医師）】
■タウンニュース【2014/10/10「東日本大震災支援プロジェクト」（小綿一平医師）】
■BLOGOS【2014/12/30「東京プロジェクト」】

<雑誌>
■ゆうゆう【2014/3/11「東日本大震災支援プロジェクト」】
■JuniorAERA【2014/3/15「東京プロジェクト」】

キャンペーン

■1000人のスマイル作戦 & ラオス小児医療プロジェクト応援キャンペーン

「スマイル作戦」で治療を受ける子どもたちとその家族に向けたメッセージを贈って応援するキャンペーンを開催しました。2014年度は各施設・イベント会場において計10回開催しました。多くの方にご参加頂いたお陰で、インスタントカメラやクレヨンを使って、温かいメッセージを現地で医療を待つ人たちに届けることができました。

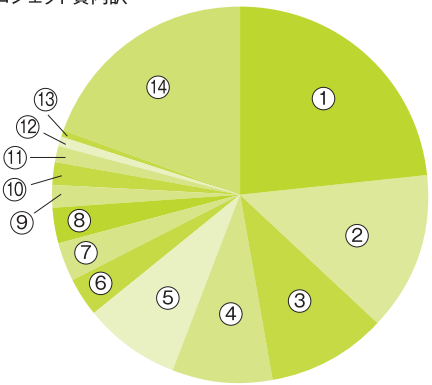
2014年度決算

世界の医療団は、1名の監事による会計及び業務の内部監査と、外部の独立した公認会計士による会計監査を毎年度受けています。

収入（単位:日本円）	197,719,804
寄付	100,924,340
助成金	95,035,347
収益事業	1,369,464
謝礼 ほか	250,653
会費	140,000

支出（単位:日本円）	192,692,829
プロジェクト（医療支援+証言活動）	146,450,230
募金事業	38,811,638
商標権使用料等事業	1,519,031
管理費	5,911,930

◎プロジェクト費内訳



①ラオス小児医療プロジェクト	23.4%
②エボラ/緊急支援プロジェクト	13.8%
③東京プロジェクト	10.1%
④東日本大震災被災地支援プロジェクト	8.8%
⑤スマイル作戦	8.1%
⑥中央アフリカ/緊急支援プロジェクト	3.5%
⑦マリ/緊急支援プロジェクト	3.2%
⑧ネパール/母子保健支援プロジェクト	3.1%
⑨ガザ/緊急支援プロジェクト	2.0%
⑩シリア/緊急及び長期支援プロジェクト	2.0%
⑪フィリピン/緊急支援プロジェクト	1.2%
⑫コンゴ/ストリートチルドレン支援プロジェクト	1.0%
⑬ニジェール/母子保健プロジェクト	0.4%
⑭証言活動*	19.4%

＊ニュースレター発行、MDMの活動紹介イベント・写真展など開催、NGOイベントへの参加等

世界の医療団は「認定NPO法人」として東京都より認定されています。
世界の医療団へのご寄付は税制上の優遇措置を受けることが出来ます。

政策提言（アドボカシー）

■国際キャンペーン「Names not Number」を実施。
3月3日月曜日の国際女性デーを機に、避妊と安全で合法な中絶に対し誰もが普遍的なアクセスを求める国際キャンペーンを行ないました。亡くなった人達をただ単に「数」としてではなく「人間」として捉えてもらう取り組みです。9月の国連総会までに国連事務総長宛の署名を集め、「女性の権利」の支援を世界的にアドボカシーとして提言しました。